

地域社会への子どもの参加についての研究

—総合的な学習の時間における可能性—

中野真志 (愛知教育大学生生活科教育講座)

太町智 (愛知教育大学大学院)

(2003年11月28日受理)

A Study of Children's Participation in Their Community

Shinji NAKANO (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

Satoshi OHMACHI (Graduate Student, Aichi University of Education)

要約 現在、日本の多くの学校で、総合的な学習の時間を利用して、地域社会に参加する活動が行われている。日本においても、子どもは「権利を行使する主体」とする「子どもの権利条約」の理念が浸透しつつあることは明らかであろう。しかし、学校における子どもの参加の中には、教師主導の活動であったり、イベント的で表面的な活動に終始してしまったりする実践も少なくない。地域社会を住み良い環境にするためには、子どもが責任を負い、大人と意思決定を共有する参加が必要である。本小論では、ロジャー・ハートやデヴィッド・ドリスケルの理論を手がかりとして、総合的な学習の時間の事例を分析することも含め、子どもの参加の質を高める方策について論じる。

Keywords: 参加, ロジャー・ハート, 総合的な学習の時間

I はじめに

1990年代は、自然資源の利用や環境管理に市民が果たす役割を、多くの国の人々がラディカルに見直すようになった時代であり、また、世界のほとんどの国が、1989年に国連で採択された「子どもの権利条約」に批准した時代であった。この条約によって、子どもりが、自分の将来や地域社会の未来を形成することに、どの程度の権利や責任を負っているかについて、人々は改めて考えるようになってきた。そして現在、子どもを積極的に社会に参加させることは、国際的にも広く受け入れられつつある。

日本においても、1994年に「子どもの権利条約」が批准されて以来、自治体やNPOなどが子どもの参加に積極的に取り組んでいる。学校においては、新学習指導要領のもとで、「総合的な学習の時間」が実施されたことにより、ボランティア活動、福祉体験活動等、子どもが地域社会に参加する機会が増えつつある。また、小・中学校の運営に、子どもが参加している例もある。このような状況の中で、自分が他の人や学校、地域に役立っていると実感し、生き生きとした学習を積極的に行う子どもがいる。しかし、その一方で、そのような学習活動に興味を見いださず、表面的であったり、形だけの参加にとどまっていたりする子どもも少なからず見受けられる。また、子どもの能力が十分に認められておらず、子どもが自分自身の能力を発揮する場が与えられていないという問題もある。

そこで、今一度子どもが社会に参加することの意義について再考し、学校においては、参加のレベルや、教師がどのように子どもの参加を促すべきかについて考える必要がある。本小論では、特に総合的な学習の時間において、より多くの子どもの参加を、表面的で形だけのものではなく、より質の高い参加にするための方策について論じる。

II 子どもによる参加の意義

子どもは、地域社会に参加することによって、多くの人と関わり、その中で自己の様々な能力を高めていく。しかし、子どもの参加がもたらす効果はこれだけに止まらない。

デヴィッド・ドリスケル (David Driskell) は、子どもの参加は、社会の構成員すべての人にとっての利益になり得るとして、以下のような具体例を挙げている²⁾。

①子どもにとっての利益

- ・新しいわくわくするような活動に参加する。
- ・新しい視点で地域社会を理解する。
- ・民主主義と寛容について学ぶ。
- ・地域社会の模範となる役割を果たす人々と人的資源となる人々を含む新しい仲間のネットワークを発展させる。
- ・新しいスキルと技術を身につける。

- ・地域社会に肯定的な変化を創り出すことに役立つ。
- ・環境を管理するという感覚，公民としての責任を発達させる。
- ・自分たちが設定した目標を達成する諸能力への自信を発達させる。
- ・自尊感情，アイデンティティー，プライドを強化する。

②地域社会の他の構成員にとっての利益

- ・肯定的，建設的な方法で子どもと相互作用し，世代間にしばしば存在する誤解や不信を克服するのに役立つ。
- ・地域社会の子どもが世界を，自分たちの地域社会を，そして自分自身をどのように見ているかを理解する。
- ・地域の子どもの生活の質を改善し得る方法を確認する。
- ・地域社会への愛着，その場所に対する誇りを持つ。
- ・子どものアイデアと貢献の真価を認める。
- ・地域社会の未来に時間とエネルギーを投資する。

③地域社会の行政関係者および政策決定者にとっての利益

- ・自分たちがサービスを提供する地域社会の要求と問題をよりよく理解する。
- ・より良い，より情報豊かな計画，開発の決定をする。
- ・政策や開発の意思決定に本来備わっている複雑さ，それに関わる矛盾について地域社会の構成員を教育する。
- ・地域レベルで子どもの権利条約についての国連条約の命令と精神を実践する。
- ・持続可能な発展を実施する諸努力に子どもを関わらせ，それによってアジェンダ21³⁾，ハビタット・アジェンダ⁴⁾を達成するのに役立つ。
- ・より子どもに親しみをもち，人間らしい都市環境を創り出す。

ロジャー・ハート (Roger A. Hart) は、「社会発展への最も信頼できるアプローチは，環境の管理について理解と関心を持ち，民主的なコミュニティづくりに積極的に参加し活動する市民を育てることである」⁵⁾と提唱するとともに，子どもの参加力に注目し，「子どもたちは，直接参加することを通してはじめて，民主主義についての真の正しい認識や，彼ら自身のコンピテンスや参加することへの責任の感覚を発達させることができるようになる。物質的な環境（子どもの居場所や活動する場所など）を計画したり，デザインしたり，監視したり，管理したりすることは，子どもの参加の実践をするための理想的な分野である」⁶⁾と述べ，子どもが直接地域と関わることによって，子ども自身が成長し，それが社会の発展につながると主張している。

このような利益があるにもかかわらず，未だに「子どもに責任を負わせることができるのか」「子どもは知識や経験，技能が不足しているのでは，参加できないのではないか」「子どもを甘やかすことになるのではないか」といった，子どもの参加を認めようとしにくい意見も根強くあるのが現状である。まず，子どもの参加に対する大人の意識や態度を変えていくことが不可欠である。

III 子どもによる理想的な参加とは

今日，地域社会における開発への市民参加は，広く受け入れられている。そして，子どもの参加に対する支援は成長し続けている。

しかしながら，市民参加（特に子どもの参加）は，しばしば誤解され，実際に多く見られる参加は，見間違いであったり，不適当な方法で適用されたり，もしくはコントロールされていたり，地域社会の利益に反した目的のために操られている。

したがって，我々は参加の定義について確認する必要がある。何が参加であり，何が参加でないかということの理解は，どのような参加の構想と計画とプログラムにも必要な基本的前提となる。

理想的な参加は，計画立案や意思決定の権限を，その決定によって最も影響を受ける地域の人々へ移行するものである。ドリスケルは，このような理想的な参加の必要条件として，次のようなものを挙げている⁷⁾。

・地域性 (Local)

参加的な開発は，地域的，国家的もしくは国際的な規模で促進される場合もある。しかし，その実行は元来地域のものであり，地域社会のニーズや問題点に焦点をあて，調整されるべきである。部外者は，ファシリテーター，アニメーター，もしくは技術専門家としての役割を果たすかもしれないが，彼らは，彼ら自身の偏見や見地に基づいた解決方法や予想される結果について指示するためではなく，地域社会に耳を傾け，サービスを提供するためにいる。

・透明性 (Transparent)

すべての参加者にとって，参加プロジェクトの目的は明確である。参加プロジェクトに関わる外部の専門家は誰であるのか，そこで何をするのか，そして，何を期待でき，何を期待できないか明らかでなくてはならない。

・包括性 (Inclusive)

参加の過程は，時代，性，人種的・民族的背景，宗教，障害，社会・経済的地位に関わらず，地域全員にとってアクセス可能であるべきである。参加プロジェクトについての重大な問題は，誰が参加したかという

ことよりは、誰が参加しなかったか、そして、なぜ参加しなかったかということである。

・双方向性 (Interactive)

参加は、地域社会において、発言力のある地域住民だけでなく、子どもの声を含め、他の人の声に耳を傾ける地域住民のものである。参加的な開発は、大人と子どもが協働しながら行う、地域社会全体の対話である。

・応答性 (Responsive)

参加の過程は、地域のニーズと条件に影響を受けるので、すべての過程は異なってくる。一般的なアプローチには、一貫性があるかもしれないが、的確な順序は決して同じではない。ファシリテーターは、柔軟で、変化するニーズと条件に応答し、どんな時点においても、厳格なルールではなく、彼ら自身の最も良い判断に依存する。援助している政府機関と専門家は、参加に必要な時間を与えることについて同意している。このような時間は、意見を言う人や、他の人の声に耳を傾ける人、問題点やオールドナティブを探求したり分析したりする人、そして行為の計画を策定し、実行する人といった、すべての人に認められている。これは、子どもの参加に関する、特に重要な原則である。

・関連性 (Relevant)

参加は、地域住民が持っている、彼らが住んでいる地域についての情報や洞察、そして彼らの生活に影響する問題点といった、地域的な知識に基づく。それは、子どもが地域社会に持っているイメージや知識、そして知覚を認め、尊重する（子どものそれは、大人のそれとしばしば大変異なっている）。また、技術的な情報や抽象的な概念は、若年層を含む地域住民が理解することができるよう配慮されるべきである。

・教育性 (Educational)

参加的な開発は、プロジェクトのスポンサーや地元の役人、プロジェクトのスタッフだけでなく、すべての年齢の地域居住者全員のための学習の過程である。参加が成功するためには、あらゆる関係者が、学び、態度を変え、理解の新しい方法を構築しなければならない。若者にとって、参加は、環境評価やグループによる問題解決、そして民主的な意思決定における彼らの能力を築き上げるための手段である。これは、プロジェクトが達成したいと考えている他のどんなものより貴重である。

・反省性 (Reflective)

参加的な開発は、個人やグループの学習のための振り返りの機会としての役割をかなり強調する。振り返りを通して、参加者は、過程とその結果の両方に関して、何が改良できるかということだけでなく、何がより役立つかを確認する。このことは、しばしば、地域、もしくは彼らのグループの過程に影響するかもしれないより大きな問題点を確認するように導き、参加者の

意識のレベルを上げ、新たなグループの行為を成功へと導く。

・可変性 (Transformative)

参加的な開発の究極の目標は、地域社会におけるいくつかの形での変化である。この変化は、物質的、経済的变化に制限されず、地域社会と社会全体との関係における変化や、参加者との関係の変化、そして、おそらく最も重要なことは、すべての人を含む個人的な価値観や知覚の変化をも含む。子どもにとって、この変化させる過程は、かなり意味深く、情報豊かで活動的で責任のある市民としての、彼らの個人的な価値判断の基準や、彼らの専門知識の形成を助ける。

・持続性 (Sustainable)

もし、地域住民がプロジェクトを支持し、それが彼らのニーズに応えられると感じるならば、彼らはその実行と進行中の管理運営により積極的に参加し、プロジェクトの持続可能性をサポートする。行為に対する個人的な義務感とコミットメントについての強い感覚と同様に、地域的な技能や能力を育てるとき、参加を通して、持続的な開発を達成することができる。

・個人性 (Personal)

参加は、人間の相互作用の過程である。成功するか否かは、関わりのある組織や地域社会の人々、および個人の態度、価値観、技能に影響される。参加の過程において、若者と協働する大人は、コントロールを若い参加者に任せることができ、若者のニーズに対して理解力があり、敏感で、心が広く、耳を傾けることや学ぶことを望み、そして率直でなければならない。最も重要なことは、彼らが、子どもたちの利益について本当に関心を持ち、彼らの生活について肯定的な変化をもたらすよう、彼らと協働することに専念する必要があるということである。

・自発性 (Voluntary)

参加は決して強制されるものではない。人々は、自分たちが問題の重要性を正しく認識し、彼らに関わることができる方法を理解し、自分たちの参加が影響を及ぼすと信じて、参加のプロセスに従事している。

総合的な学習の時間における参加活動に、これらの条件がどの程度満たされているかが、その活動において参加の質を高めるための指針となるであろう。

IV 子どもの参加のレベル

子どもを地域社会に参加させる活動は数多く行われている。これらの活動が、どのレベルで行われているかの目安となるのが、ハートによって示された「参加のはしご」である(図1)⁸⁾。

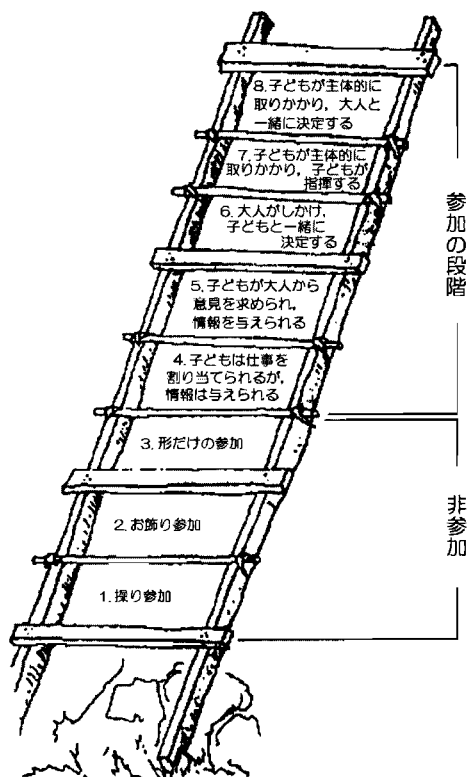


図1 参加のはしご

実際の参加活動においては、各段階ごとの区別がこれほど明確であるとは限らないが、この図ははしごの上段に行くほど、子どもが主体的に関わる度合いが高まることを示している。

ハートは、最初の3つのレベルの「操り」や「お飾り」や「形だけ」のものを参加とは呼ばず、はしごの4段目より上のレベルを参加と定義し、非参加と区別している。そして、子どもの参加に必要な情報が与えられるかどうか、参加と非参加の大きな違いであると考えられる。

非参加と参加について、ハートは以下のように解説している⁹⁾。

①非参加

1. 操り参加

操り参加は、大人が目的を達成するために、子どもたちに情報を与えないで、意識的に子どもを利用するとき起こる。操り参加の例は、有害廃棄物に反対するプラカードを子どもの首にかけてデモ行進をさせるなど、大人が意識的に自分の言いたいことを子どもの声で言わせるものである。

2. お飾り参加

お飾り参加は、大人の主張の支援者として、あたかも子どもが理解して参加しているように見せかけているものである。お飾り参加の例は、子どもが、何らかの主張を掲げたTシャツなどを着ているが、その主張をほとんど理解しておらず、その行事を組織することに少しも関わっていないものである。

3. 形だけの参加

形だけの参加は、表面的なレベルで子どもを参加させる非常にありふれた形式である。子どもが一見参加しているように見えるが、実際は、子どもたちが問題やコミュニケーションの方法を選ぶことがほとんど、あるいはまったくできなかつたり、自分の意見を組み立てる時間がほとんどなかつたりする。比較的高いレベルの相互作用や、見せかけの意思決定権があるかもしれないが、現実には、決して意味のあるレベルにはない。形だけの参加の例は、子どもが、大人たちによって公開討論会に参加させられ、その中で、仲間と相談する機会がほとんどないにもかかわらず、「子どもの声」を代弁させられるようなものである。

②参加

4. 仕事を割り当てられるが、情報は与えられる参加 (社会的動員)

子どもが、自らプロジェクトを始めたわけではなくても、それに関して十分に情報が与えられ、本当に自分の問題として感じていれば、それは参加といえる活動である。大人が出したごみを子どもが集める活動がよく行われるが、この場合、子どもが単にそのプロジェクトで無給で働く労働力として扱われるか、それとも、ごみを散らかす原因とごみ問題に責任がある大人を変えるにはどうしたらよいかについて、子どもたちが批判的に考え始めるように扱われるかが重要である。

5. 大人から意見を求められ、情報を与えられる参加

プロジェクトが大人によって計画され、大人によって運営されようとも、子どもたちがプロセスを理解し、意見を求められ、そして子どもの意見が真剣に扱われるのであれば、子どもが参加するプロジェクトといえる。例えば、大人が子どもに、自分の住む町をどのようにしたいかといった調査をする場合、少なくとも子どもは、調査の目的を十分知らされ、調査を進んで引き受けるように依頼され、一人ひとりがその結果を十分に知らされるべきである。

6. 大人がしかけ、子どもと一緒に決定する参加

プロジェクトによっては、大人が着手し、大人と子どもと一緒に決定する参加もあるだろう。子どもは、自分が関わる環境の計画とデザインに参加すべきであることを容易に理解できるので、子どもの参加の手始めとしてよいプロジェクトであるかもしれない。

大人と子どもと一緒に意思決定をするプロジェクトを本当に達成するためには、子どもはある程度すべての過程に参加する必要がある。子どもたちに机上の計画に参加させるだけで十分であり、技術的な細部の問題は、そのプロジェクトを始めた大人やエンジニア、あるいは建設家のような専門家に任せれば良いと考えられがちであるが、これは誤りである。細部の検討になると妥協や原案の縮小がつきものであるが、子

どもは、どのように妥協がなされるかを理解することで、参加が名目だけのものではなく、また、環境がどのようにしてつくられるかについての現実的な考えを持つようになる。

7. 子どもが主体的に取りかかり、子どもが指揮する参加

このようなプロジェクトは、子どもの「遊び」の中で見られる。「遊び」は、我々が伸ばしたいと考えている子どもの基本的能力を育てる大切な場であるので、無視してはならない。例えば、「冒険遊び場(様々な材料がたくさん置いてある施設。子どもの遊びやものづくりの活動を援助はするが、先頭に立って活動したり指導したりはしないプレイリーダーと呼ばれる職員が配置されている場)」で活動した子どもは、仲間と協力することを覚え、将来、地域社会に有益な貢献が期待できる。

8. 子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する参加

このレベルの参加は、大人が関わっているので、参加の最高のレベルではないと考える人もいる。しかし、子どもが自分たちで始めたプロジェクトで、大人と一緒に活動したいと考えることは、子どもたちに地域社会の構成員としての役割を果たす力と自信の表れであると考えられる。したがって、このレベルは、参加の最高のレベルといえるのではないだろうか。

大人を巻き込むことは必ずしも大人の支配を受けることを意味しないと子どもたちが感じて、大人を信頼する雰囲気が生まれるまでには、少し時間がかかるが、大人は、子どもによりよく応えるために、子どもたちの言うことをよく聴き、子どもを注意深く観察する必

要がある。このような大人の能力が、子どもたちの参加のレベルを上げる役割を果たすであろう。

「参加のはしご」の利用の目的は、子どもたちの参加を各レベルに当てはめて区別し、選別することでもなければ、常に最高のレベルで参加させることでもない。子どもの参加を考える場合、子どもの参加がどのようなレベルにあるかを判断した上で、少しでも高いレベルの参加となるよう配慮する必要がある。その際には、子どもの主体性の位置付けと、子どもの主体性が発展していくため適切な指導や援助のあり方が、問われるべき重要なポイントである。

V 子どもによる参加の質を高めるために

子どもが価値のあるパートナーとして扱われ、意思決定が共有されることは、最も理想的な参加の形である。しかし、このような意思決定を共有する参加が常に最適であるとは限らない。つまり、このような参加を実現するためには、子ども自身が社会を変化させる力を備えることが必要であり、社会変化の過程に子どもを参加させることに責任を感じている大人の支援が不可欠となる。実際には、ほとんどのプロジェクトが、その過程や、さらに一つのイベントの範囲内でさえ、異なった最適な参加の形が存在する。

ドリスケルは、図2のように、縦軸「子どもが決定し、変化に影響を与える力の増大」、横軸「地域社会における他の人との相互作用や協働」の2つの次元に基づいて、参加と非参加を定義している¹⁰⁾。

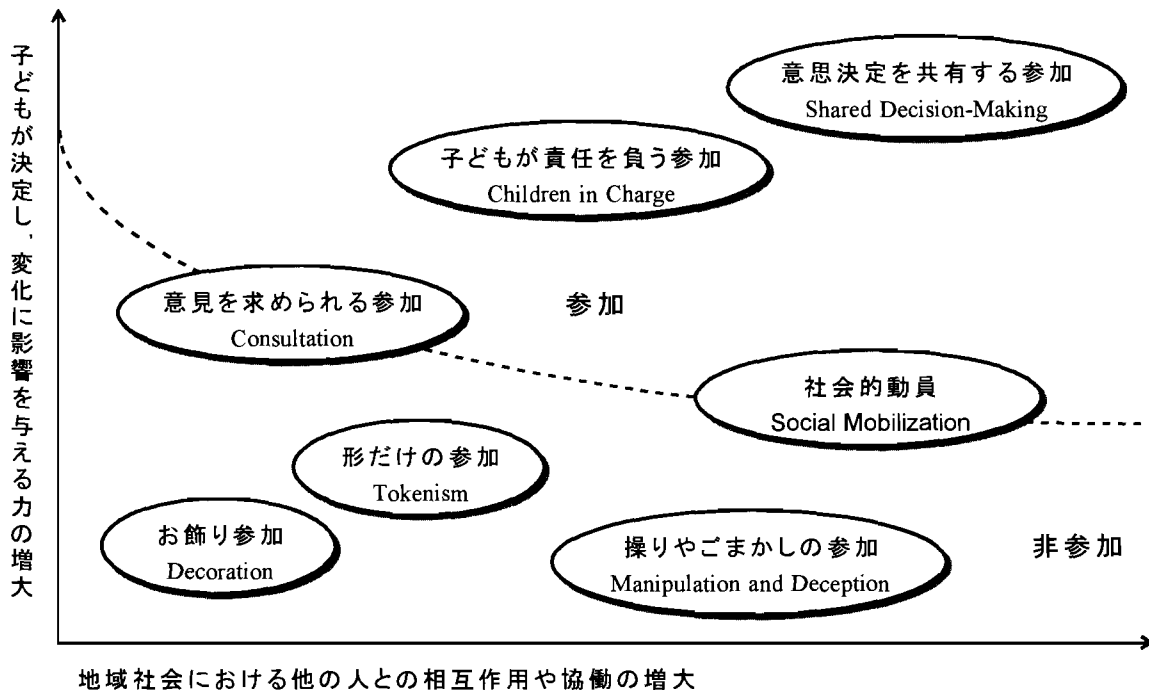


図2 子どもの参加の次元

子どもが決定権を持ち、責任を負うかどうか、さらに参加の質を高める重要な基準だと考える。この図は、参加を質的に高めるためには、子どもが主体的に意思決定する力だけでなく、他の人と関わる力を発達させることの重要性を示している。

以下、総合的な学習の時間での参加活動の具体的な実践事例の分析を通して、子どもの参加の質を高めるために必要な方策を考えてみたい。

実践事例 観音寺南小学校ことひき学習「鳴き砂再生計画」¹¹⁾

香川県の観音寺南小学校では、1997年より、「みつめ学習」「ふれあい活動」「ふるさと発見学習」の3領域で構成される総合的な学習の時間「ことひき学習」を行っている。

学校の近辺には、財田川やそれにつながる有明浜があり、子どもたちは、これらの地域の自然に常に関わる活動をしている。第1, 2学年の生活科では、「ありあけはまはともだち」として、有明浜で思いっきり遊び、その楽しさを伝える活動をしており、第4学年のことひき学習では、ふるさる川の自然のすばらしさに触れ、大切にしていこうとする活動をしている。この過程の中で、子どもたちは地域の自然と発見学習の中で、「財田川探検隊」として、地域に流れに直接触れ、そのすばらしさを知ると同時に、瀬戸内海の汚染などの問題点にも気づいていく。そして、第5学年では、「有明浜を守ろう」というテーマのもとで、有明浜の環境に目を向け、自分たちでできる環境改善に取り組むのである。ここで取り上げる「鳴き砂再生計画」は、2000年に第5学年で行われた実践である。

子どもたちは、有明浜の自然環境に目を向ける中で、かつては鳴き砂であった有明浜の砂が、瀬戸内海の汚染により鳴らなくなってしまったことを知る。5年生は、6年生に昨年取り組んだ活動の様子や分からないことを尋ね、また、6年生からは、「有明浜を守るために、5年生にも協力してほしい」とメッセージが寄せられた。こうして5年生の鳴き砂再生計画が始動した。

1 つかむ段階

最初に子どもたちは、4年生で行った財田川の調査をもとに、有明浜の汚れの原因を考えた。そして、財田川からごみの行方をたどりながら有明浜へと移動し、有明浜の汚れや生き物の様子を観察した。また、家庭科の「清潔なすまい」の学習を生かし、家庭から出されるごみと海の汚れに関心を持つことができた。その後、兵庫県琴引浜から取り寄せた鳴き砂が、コップの中で鳴く音を聞くうちに、昔の有明浜の砂は鳴いていたそうだが、なぜ今の有明浜の砂は鳴かないのか、疑問を持つようになった。

子どもたちは、自分たちで砂を鳴かしてみたいと思うようになり、砂をペットボトルに入れて何度も水で洗ったり、ピーカーで煮沸したりした。しかし、なかなか砂を鳴かせることはできなかった。

つかむ段階では、活動そのものは大人主導で進められているが、子どもたちは、身の回りの環境について、大人からある程度の情報を与えられている。この段階は、参加のはしごの第4段階、社会的動員に近いレベルの参加であると考えられる。

2 追求する段階

砂を鳴かそうと試行錯誤する子どもたちは、ゲストティーチャーの話から、かつての有明浜の様子を聞き、有明浜の自然を守ることの大切さや難しさを感じるようになる。

その後、調べてきたことや問題点について話し合い、「有明浜を守っていくためには、自分の生活を少しは我慢しなければならない」などの意見が多くの子供たちから出された。

子どもたちは、自分の課題を決め、教師とともに追求するための方法を検討していった。そして、各自の課題について、グループに別れ、次のような実験、検証を行った。

- ア) 水を入れて何度も洗ったが、鳴くところまではいかなかった。何度も洗っているうちに砂の音が少し高くなっていることに気がついた。もっと洗ったら鳴くようになるのではないかと期待した。
- イ) きっと粒が小さく揃っている方が鳴きやすいのだろうと予想し、ピンセットでより分けている。しかし、細かい粒にしても鳴かない。一度汚してしまった自然は、なかなか元に戻らないのだと実感した。
- ウ) 砂と海浜植物を一緒に入れてぐつぐつ煮ている。海浜植物が座礁したタンカーの重油を消してしまったということから発想している。
- エ) 有明浜の砂と鳴き砂の違いを調べている。色や粒の大きさの違いに気づいた。習ったばかりの顕微鏡の使い方が生かされている。
- オ) 分けてもらった鳴き砂に洗剤やタバコ、油を入れてみると鳴かなくなった。有明浜の砂が鳴かなくなった原因の一つは、このようなごみや生活廃水かもしれないということに気づいた。
- カ) 細かくちぎったアルミホイルを入れても鳴かなくなったが、それを取り除くと、また鳴くようになった。そのことから、有明浜の砂もごみを取り除くと、また鳴くようになるかもしれないと考えた。

それぞれのグループが、実験、検証を行う中で、発見したことや思ったことなどを紹介し合い、有明浜が

戦後長い年月をかけて次第に汚れてしまったこと、それをきれいにするのは一朝一夕にはいかないことを理解した。しかし、「自分たちのできることから少しずつでも続けていけば、いつかきっと鳴き砂の有明浜を蘇らせることができる」という思いが、子どもたちの中に強くなっていった。

追求する段階では、大人が子どもたちに情報を与えるだけでなく、子どもたちに実験、検証する活動に主体的に取り組ませることで、参加意欲をさらに高めることになった。

3 活かす段階

子どもたちは、有明浜の環境を良くするために自分たちができそうなことを考えた。

その一つは、ごみ拾いのボランティアに参加して、流れ着いたごみを取り除くことであった。子どもたちは、鳴き砂に戻す実験から、ごみを取り除けば、きっと砂が鳴くだろうと考えた。そしてもう一つは、地域の人々に自分たちの思いを発信することであった。教師は、発信のための多様な表現方法を提示し、子どもたちも、自分たちなりの工夫をしていった。駅やビル、小学校に自分たちで電話をかけ、お願いをしてポスターを貼っていった。

子どもたちは、発信する活動に取り組むうちに、「昔のようなきれいな浜に戻ってほしい」という願いを持っている人が多いことにも気づき、自分の思いを確かにするとともに、自分たちの活動に自信を持つようになった。

学習後、月に1回、わずかな人数のボランティアで行われている有明浜のクリーン活動には、教師と共に参加する子どもたちの姿が見られるようになった。

活かす段階では、子どもたちは身近な環境を守るためにできることを自ら考え実行していった。そして、地域への発信を通して、地域の人々とのつながりを意識するようになり、地域の一員としての自覚を深めることができた。さらに、活動に大人を巻き込んでいくことで、さらに参加のレベルが高まったと考えられる。この段階は、ハートの参加のはしごでは第6段階、ドリスケルの参加の理論においては、意見を求められる参加にあたると思われる。

活かす段階を経て、鳴き砂再生計画の実践は、ドリスケルの理想的な参加の必要条件をどの程度満たしているだろうか。実践が紹介されている『子どもたちのプロジェクトS』（村川雅弘編）から読みとれる範囲内であるので、すべての条件について分析することはできないが、「地域性」「双方向性」「応答性」「持続性」「自発性」といった条件については、十分満たされている。しかし、「包括性」や「教育性」、「可変性」に

ついては、まだ十分ではないと考えられる。地域には、有明浜に無関心な大人もいるだろうが、自分たちと異なる考えを持つ大人と接することも重要な条件である。また、そのような大人たちがプロジェクトに参加し、学び、知覚や価値観、態度を変化させることで、社会的な変化を促すことができるのである。「包括性」「教育性」「可変性」という条件を短期間で満たすことは難しいと考えられるが、これらの条件が満たされることで、さらに理想的な参加に近づけよう。

実践事例の参加のレベルの分析

鳴き砂再生計画において重要なことは、たくさんの地域の人たちの協力によって成り立っていることである。地域の人々をゲストティーチャーとして招き、有明浜への思いや願いを語ってもらっている。また、行政として有明浜のボランティア活動に取り組み、話をしてくれた市の職員、ポスターを貼らせてくれた公共施設や各種団体の代表の人たち、子どもたちのインタビューに快く答えてくれたり、一緒にボランティア活動に取り組んでくれたりした地域の人たちなど、子どもたちは、多くの人たちと関わった。

地域の人たちとの関わりは、教師だけでは伝えきれない有明浜のすばらしさを子どもたちに感じ取らせる有効な手段である。しかし、子どもたちにとって、地域の人たちと関わることそのものに、非常に大きな意味がある。子どもたちは、有明浜に対しての地域の人たちの思いや願いに触れ、自分の有明浜に対する気持ちを明確にするとともに、自分に何ができるか真剣に考えた。また、インタビューに挑戦したり、ボランティア活動に参加するなど、地域に積極的に関わられるようになっていった。

財田川や有明浜といった身近な環境に興味や関心は持っていたものの、鳴き砂再生計画に取り組むまで、子どもたちは、身近な環境に対して主体的な活動はしてこなかった。4年生で行った財田川の調査の段階では、情報は与えられているものの、参加のレベルにおいては、まだ高いレベルであるとはいえない活動であった。

しかし、5年生になり、子どもたちが主体的に課題を追求していく中で、徐々に参加と呼べる活動になっていった。そして、地域の人たちと関わることによって、この活動はさらに質の高いレベルの参加になった。この活動は、その時点で、子どもが責任を負う参加の一手手前にまでは達していると思われる。

今後、さらに参加のレベルを高めていくためには、どのような手だてが必要であろうか。まず、より地域社会における他の人との相互作用や協働を増大させることである。おそらく、ボランティア活動によってきれいになった有明浜も、流れ着くごみや生活廃水などによって再び汚れることになるだろう。その際、さら

に大きな地域社会で問題を考えることが必要となる。そうすると、今まで行ってきた発信活動をさらに大きく、広く行わなければならない。こうした活動の中で、子どもたちは自分の対象に関わる能力を高めていくことができるだろう。

ことひき学習における有明浜に関わる活動は、現在も継続して行われており、有明浜は徐々にきれいになっている。また、砂浜を守る活動が新聞やテレビに取り上げられるようになり、香川県も活動を支援する体制をとるようになった。現在、中学生になった彼らの中には、月に1回の有明浜クリーン活動に参加している子もおり、イベント的に終わることのない実践であったことは明らかである。今後、この活動が継続して行われ、さらに質の高いレベルの参加となることを期待したい。

VI おわりに

より質の高い参加を可能にするためには、まず、子どもの参加に対する大人の意識や態度を変えていく必要がある。そのためには、子どもの権利や能力が認められなければならない。子どもの権利を認めるということは、子どものわがままを許すことでも、甘やかすことでもない。子どもが参加をする中で、当然子どもの意見が通らないこともあるが、このような挫折、もしくは試行錯誤や失敗を経験する中で、社会について知ると同時に、自己の能力を高めていくことができる。

さらに、子どもたちに、様々な人と関わる機会を与えることが必要である。大人にとって、子どもの資質や能力を高めるだけでなく、どのように子どもを地域社会に関わらせるか、その量と質が重要である。また、異学年の子どもも含む子ども同士や、子どもと教師の相互作用や協働の量的、質的増大も重要である。地域社会や学校の多様な人々との関わりが増えれば増えるほど、その参加はより高いレベルに近づくのであるが、その参加の質も考慮せねばならない。

もはや、学校は教師だけで動かしていく時代ではない。教師と子ども以外にも、保護者や地域の人々、行政の関係者らが一緒に学校を支えていくことが必要である。このような認識を大人たちが持ち、協働することで、子どもは様々な人と関わることができ、質の高いレベルの参加が可能になる。

そして、子どもの参加は、常に最高のレベルで活動しなければいけないというものではない。子どもの参加のための資質や能力の発達段階に合った、最大限の参加ができる機会を与えることが重要である。総合的な学習の時間は、学校教育の中で、このような機会を与えることができる最も有効なものであろう。総合的な学習の時間において、このような参加的な活動を行うことは、子どもと地域との関わりが乏しくなってい

る今日、特に重要である。

今後、総合的な学習の時間を中心に、子どもが地域に参加する機会はさらに増えていくだろう。そして、教師には、子どもの能力が最大限に引き出されるような支援や指導が望まれる。このような教師の支援や指導によって、子どもたちは、自ら自己変革でき、地域に参加できる価値ある市民に成長するのである。

注

- 1) ここでの「子ども」は、「子どもの権利条約」に基づいて、18歳未満の者と定義する。
- 2) David Driskell, *Creating Better Cities with Children and Youth*, UK: Earthscan Publications, 2002, p.35
- 3) 1992年6月にリオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミットにおいて採択された、地球環境保全のための行動計画。
- 4) 1996年にイスタンブルで開かれた第2回国連人間居住会議（ハビタットⅡ）において採択された行動計画。世界的な人口の増加や地方から都市への人口移動等を背景に、10億人の人々が適切な住居を得られずにおり、さらに、21世紀には世界人口の半分が都市部に居住するという都市化に伴う問題に対処するため、人間居住に関する目標および原則、公約、行動計画が示された。
- 5) Roger A. Hart, *Children's Participation: The Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community Development and Environmental Care.*, UK: Earthscan Publications, 1997, p.3
(ロジャー・ハート著、木下勇、田中治彦、南博文監修、IPA日本支部訳『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000年参照)
- 6) Ibid., p.3
- 7) David Driskell, op.cit., pp.32-34
- 8) Roger A. Hart, op.cit., p.41
- 9) ロジャー・ハート、前掲書、41-46頁要約
- 10) David Driskell, op. cit., p.40
- 11) 瀬戸貴子「鳴き砂再生計画」村川雅弘編『子どもたちのプロジェクトS』日本放送出版協会、2002年

この文献には、総合的な学習の時間において子どもたちが展開した大人顔負けのダイナミックなプロジェクトが紹介されている。そして、今回取り上げたプロジェクトは、子どもたちが周りの大人と関わりながら主体的に課題に取り組んだ、有意義な実践である。

参考文献

- ・ David Driskell, *Creating Better Cities with Children*

- and Youth, UK: Earthscan Publications, 2002
- ・ Roger A. Hart, Children's Participation: The Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community Development and Environmental Care., UK: Earthscan Publications, 1997
 - ・ Cathie Holden and Nick Clough, Children as Citizens, Jessica Kingsley Publishers, 1998
 - ・ 木下勇「まちづくりと子どもの参加」喜多明人, 坪井由美他編『子どもの参加と権利』三省堂, 1996年
 - ・ 瀬戸貴子「鳴き砂再生計画」村川雅弘編『子どもたちのプロジェクトS』日本放送出版協会, 2002年
 - ・ 中野真志, 秋吉知久「中学校における地域に根ざした総合的な学習」『生活科・総合的な学習研究研究第1号』愛知教育大学生生活科教育講座, 2003年
 - ・ 宮崎充治「大人にもてつだってもらわなくっちゃ」河内徳子編『学習の転換—新しい「学び」の創造』国土社, 1997年

〔付記〕

本小論は, 日本生活科・総合的な学習教育学会第12回全国大会山口大会(平成15年)における自由研究発表を加筆修正し, 論文としてまとめたものである。